

IV-53

街路景観の評価とイメージ・スケール

福井工業高等専門学校 土木工学科 正員 武井 幸久

1. はじめに

イメージに基づく都市環境の整備¹⁾。このテーマをメンタル・マップ²⁾概念に結びつけ、生活圏の評価について検討を進めてきた。今回は景観問題へと観点を変えイメージ・スケール³⁾の適用について提起する。

従来の景観評価は、SD法や一対比較法を用いて、画一的に議論するという傾向が強い。つまり、居住者意識、場所の意味や地域性を十分考慮できるものとは言えない。そこで本研究では、景観イメージを言葉と色として抽出し、場所の特性に応じた改善方向を把握するためのツール、イメージ・スケールの有効性を示した。また、路面色の影響についても明らかにした。

2. メンタル・マップ

2. 1 場所のイメージ

生活者は場所を「意味」づけることにより、そこにアイデンティティを感じるようになる。最初に関心をもつのは場所の表層、景観である。勿論、人々の感じ方は一様でなく、多様なイメージが構成される。

しかし、そうしたイメージも、場所との親密度等を基に生活者をグルーピングすれば、かなり統一性の高いものとなる。つまり、ある場所に多くの人が共通に抱いているパブリック・イメージ¹⁾を把握できれば、快適な景観形成のための大きな手掛かりとなる。

図1は、この関係を図式化したものである。これを対象化するための手法をメンタル・マップと定義し、表-2に整理した。今回の焦点は(3)認知反応型マップであり、これに基づく景観評価が目的である。

2. 2 街のイメージ色とイメージ語

街が美しいという場合、そこには多様な要因が作用している。色もその一つだが、その意味については多くの人が似通ったイメージをもつ。また、多くの色が混在しても、そこには自ずと、主調色や強調色等の区別が存在するはずである。そうした色や配色が場所に適した状態にあれば、景観は整って見えることになる。

一方、人は景観イメージを言葉で表現する。言葉と色の間には、一定の関係が想定できる。特に形容詞句では、寒色・暖色などの表現が

あるように密接に結びついている。そこである場所のイメージを形容詞句などで把握できれば、その景観の診断が可能になる。SD法はその点を根拠としている。

2. 3 景観イメージ調査

以上のことから、今回は次の2つの手法で調査した。

①SD法：20組の形容詞句対についての5段階評価。

②イメージ語・色調査：(1)60種の形容詞句、(2)30種の色から、各場所の現在、理想を表すものを選択。

また調査は、居住者を対象として場所の名称のみを示し、回答を求める方法を採用した。調査地は福井県の(a)敦賀(被験者数 110名)と(b)武生(32名)である。図-2の破線部は、①②の手法的な位置づけを示す。

2. 4 イメージ・スケール

これは小林²⁾が考案したもので、表語型と表色型がある。図-3は表語型で、SD法の因子分析結果等を基に[WARM-COOL]、[SOFT-HRAD]の2軸からなる2次元平面に語句を位置づけたものである。表色型は単色と配色に関する2種に分けられ、図-4は単色対応のスケールを示す。既に明らかのように、双方は密接に関連づけられたものである。

表1 メンタル・マップの種類と調査法

(1)イメージ想起 (Cognitive Maps)	対象区域を構成するエレメントに関する辞書的なマップを想定するもので、位置的な意味を持たない語集・描画表現。
(2)配置図式 (Locational Schemata)	対象区域の構成エレメント(凡、エッジ、ノード、ランドマーク、ディストリクト)を形状や位置関係として空間的コンテクスト(地図)の形で保持するという仮定の下で、想定されるマップ。特に、位置関係については、実際のところを認められ、その特性を分析することが目標とされる。⇒自由描画、認知距離調査。
(3)認知反応型マップ (Cognitive-Affective Maps)	圏域の嗜好性や、嗜好に関する主観的評価をマップとして想定する。現状を離れて意味を持ちえず、時代性、地域性や世代性を反映する。内容について分類すると、次の4種がある。 ①圏域の現状に関するイメージ表現 ②理想的環境のイメージ ⇒ KJ法、SD法調査、自由描画・アンケート調査。 ③圏域の現状評価 ⇒ 環境要因評価調査。 ④理想と現状の対比法・要因リスト ⇒ KJ法・アンケート

生活空間	表層物理的特徴	アイデンティティ	イメージ	見かけの様子(要素集合)	表	メンタルマップ	イメージ想起
空間	観察できる活動			機能の配置(関係性集合)	出	タムラップ	配置図式
	象徴			意味・価値(評価性)			認知反応型マップ

図-1 生活空間とアイデンティティ、イメージとメンタル・マップの関係

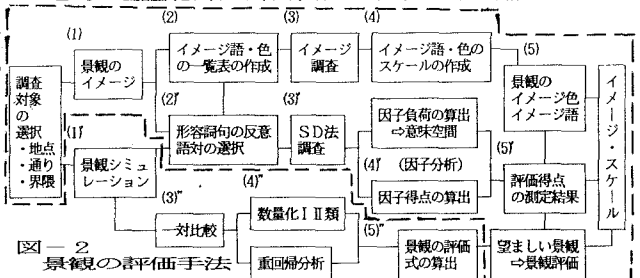


図-2 景観の調査手法

また、評価尺度としては以下の2つが想定される。

- (a) 平面的位置の差異(語や色に関する主観的判断)
- (b) 垂直方向の差異(良い、好き等の主観的判断)

今回の調査②は(a)を前提に、現在と理想状態についてのイメージ的な差異を明らかにすること、①は(a)の平面上にのらない語句や因子軸の位置づけ、(b)についての評価を検討することを目的としている。

3. 調査結果と考察

まず、①SD法の結果では、因子分析により上述の平面はほぼⅠ、Ⅱ軸に、Ⅲ軸は安心感などアメニティと対応づけられることが確認された。

次に②の結果では、表-2に現在と理想のイメージ語・色をそれぞれ想起率上位3位まで示した。さらに図-3、4は、敦賀市神楽に関するイメージ語・色を現在と理想のクロス図形としてイメージ・スケール上に展開したものである。他の場所についても同様の図を作成し、比較検討を行った結果、現状では定性的な表現とならざるをえないが、以下の点を確認できた。

1. 語と色のイメージ・スケールは必ずしも厳密な対応関係にない。だが、両図のパターンが類似する場所の類型(表-2のA~E)が存在する。
 2. 場所の類型毎に、現在と理想の語・色の共通性が高く、核施設や伝統性が重要な意味をもつ。
 3. DEを除き、グレー系統がイメージ色の主流で、路面色が主調色として暗さに結びついている。
 4. 強調色として淡いパステル・カラー志向が強い。
- 以上の点は、主に景観色を中心とした考察である。

そこで、L/Hなどの物理的指標との関連、福井以外の地域での検討が残された課題となる。

4. まとめ

以上、映像を示さず、現在と理想の景観イメージを把握できることを示し、イメージ語・色の調査からは場所の類型化や改善の方向性についての検討が可能であることを明らかにした。そのための手法としても、今回提示したイメージ・スケールの活用が有効である。

さらに、景観問題には路面色の影響が大きく、その改善が重要であることも提示することができた。

(参考文献)

- 1) K. Lynch "The Image of the City"
- 2) 武井幸久 第45回年講'90、福井高専紀要'90他
- 3) 小林重順監修「カラー・イメージ事典」

表 2 現在のイメージと理想のイメージ

		現在のイメージ語・イメージ色	理想のイメージ語・イメージ色
イメージ語	A	①神楽通 ②総社通 ③竜崎町通	さびしい・地味な・暗い 地味な・静かな・整然とした 暗い・さびしい・地味な
	B	④敦賀駅前 ⑤武生駅前 ⑥駅前電車通	さびしい・地味な・暗い 暗い・さびしい・伝統的な 汚い・暗い・行動的な
	C	⑦龍江駅前	明るい・暗い・さびしい
	D	⑧福井駅前	明るい・開放的な・近代的な
	E	⑨シビ・界隈 ⑩集式部公園	明るい・開放的な・活動的な 落ち着いた・静かな・さびしい
イメージ色	A	①神楽通 ②総社通 ③竜崎町通	シルバー・白・チャコール アサリ・シルバー・黒 黒・茶・シルバー
	B	④敦賀駅前 ⑤武生駅前 ⑥駅前電車通	白・シルバー・ダーク・ブルー 茶・シルバー・チャコール 黒・シルバー・シルバー
	C	⑦龍江駅前	黒・れんが色・茶
	D	⑧福井駅前	シルバー・ダーク・ブルー・白
	E	⑨シビ・界隈 ⑩集式部公園	チャコール・ピンク・白 緑・青・くろ色
			アサリ・あさ緑・空色 白・若竹色・緑 白・茶・若竹色 空色・ピンク・黄色 白・緑・若竹色 白・青・若竹色 空色・白・チャコール 白・緑・ピンク 白・アサリ・ピンク 緑・深緑・若竹色

(備考) ①: 敦賀市における調査、②: 武生市における調査

A: 門前町・伝統的な通、B: 駅前、D: 大型店舗周辺、E: 公園

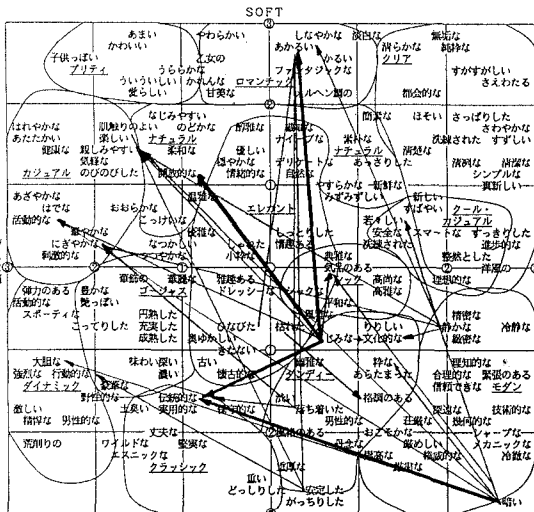


図-3 イメージ・スケール: 変形法 (敦賀市神楽)

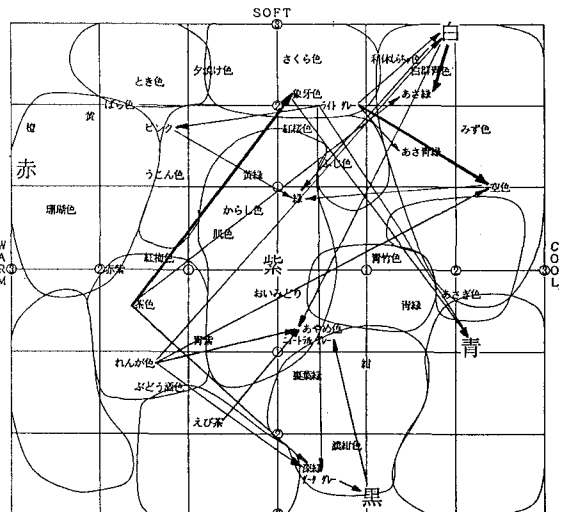


図-4 イメージ・スケール: 変色法 (敦賀市神楽)